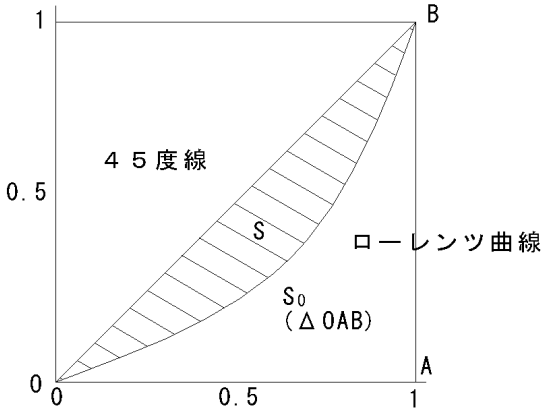
①ローレンツ曲線、ジニ曲線とは
②格差社会について

1.ローレンツ曲線、ジニ係数

ローレンツ曲線とは所得分布の不平等を計測するためのグラフ手法である。世帯や個人の所得金額や資産について、少ない世帯（人）から順に並べ、縦軸に所得の累積百分比、横軸に世帯数（人口）の累積百分比を表したグラフである。このグラフは原点から 45 度の傾斜をもつ直線から右下に膨らんだ曲線となり、不平等さを表すグラフとなる。45 度の傾斜を持つ直線は所得が完全に均等分配された平等な社会を表している。膨らみが大きくなるほど不平等であることがわかる。



図表 1

ジニ係数 G とは、ローレンツ曲線より開発された統計指標である。この指標はローレンツ曲線と 45 度線で囲まれた面積 S の 2 倍となる。一人がすべてを独占した場合のローレンツ曲線は O-A-B となり、その面積 S_0 は 0.5 となる。（図表 1 参照）平等な社会の場合は S=0 のため G=0 である。不平等な社会は S_0=0.5 のため G=2*S_0=1 となる。したがってジニ係数 G は 0～1 の間にあり 1 に近いほど不平等度（格差の程度）が強いことを表している。一般的にジニ係数で 0.4 が警戒ライン、0.6 が社会不安につながる危険ラインとされている。

2.格差社会について

格差社会については様々な見方があり、所得格差、資産格差、情報格差、医療格差、希望格差などがある。経済的側面から所得格差を中心に考える。「所得に関するジニ係数の推移」によると所得再分配前では 0.5 を上回るレベルであるが、所得再分配後では 0.4 のレベルを維持している国民生活基礎調査では 0.3 のレベルとなっている。ジニ係数は緩やかに拡大する傾向にある。

これらの原因には以下の 2 つがある。

①年齢の変化によるライフサイクル効果

「年代別にみた所得格差」(2006 年)によると 20 代から年代が上昇するほどジニ係数が高くなっている。（図表２参照）これは 20 代から 30 代は世帯主収入が 8 割を占め、依存度が高い。40~50 代は、妻や子供の補助的な収入が 2 割を占め、世帯主の収入の依存度は 7 割程度になる。60 代を過ぎると社会保障給付への依存度が 5 割以上になることによるものである。

②出生年齢の違いによるコーホート効果

特定年齢集団（コーホート）がそれまでに働いてきた経済環境の変化により、物価上昇などの効果を「経済環境変動効果」と呼ばれている。昭和 10 年世代は 40 代の時に 20 代の時の 4 倍の実質賃金を得ているのに対し。昭和 20 年世代は 2 倍しか得ていない。これは高度成長期に生きた者と低成長期に生きた者との年齢間による経済格差といえる。

また所得格差は長期的にみると拡大傾向をもっている。「全世帯の 10 分位所得シェアの推移」（国民生活基礎調査）によると 1985-1995-2006 年のそれぞれのジニ係数は 0.3603-0.3840-0.3974 と推移している。この上昇の大部分は高齢世帯比率の上昇が主な要因となっている。高齢世帯内部の格差は公的年金給付の充実により縮小する傾向があるが、健康、勤労の有無、職業、男女間、同居の有無、保有資産の大小等により経済格差は大きくなる。

危険ラインに近づきつつある日本の格差社会において社会保障の充実が望まれる。その目的のための消費税増税であるが、消費税が上がれば生活必需品に対して、所得が低い層にとっては、税負担率が大きくなり、さらに格差が生じる傾向になる。これに対して効果のある軽減税率を期待する。 (A)

年代別に見た所得格差（2006 年）

世帯主年齢	ジニ係数
～29	0.3774
30～39	0.2763
40～49	0.3034
50～59	0.3636
60～69	0.4099
70～	0.4451

図表２